

心の豊かさを求めて

村石 京

一九九〇年代がはじまり、二十一世紀の幕開けもそろそろ近くなってきた感じのする此の頃です。二十一世紀ははたしてどのような世の中になっていくのでしょうか。

一九八九年の一年間をふり返って見ると、日本では昭和から平成へと時代が変わりましたが、社会全体の動きはめまぐるしく、政治は混迷を極め、人の心は決して平静であったとはいえないような年でした。しかしそれでも日本では幸せなことに平和な一年でありましたが、眼を世界各国に転じるとその大きな変革変貌に驚くこと

が多くありました。そしてその改革のために多くの人々の血が流されたのも事実です。私にとって衝撃的だったのはベルリンの壁が取り壊されたことです。

一昨年秋、文部省からの海外研修派遣団の一員として世界の国々を訪れた折、西ドイツから東ドイツへと国境を越え、そして東ドイツに数日滞在後再び西ドイツへと戻って来ました。その際、ベルリンの壁を眼の辺に見ながら、厳しい検問を受け通過しました。緊張しながら長時間待機してやっと国境を越えたときの安堵感と、何故

こんな壁がという異様な思いとが複雑に去来したことを覚えています。そして壁一つへだてただけなのに国状の違いがあり、不自由さの中にも夫々の国民が自分の国を誇りに思う信念をもっているかの如く旅行者には受けとられたのです。あれからわずかの年月の間に双方の国民の間に蓄積された思いが力となり、自由を求める人々の手によってあの壁が取り壊されたということは、世の中の動きを象徴する出来事のように私には写りました。二年前の旅行の体験は、何か遠い昔の話だったのでしょうか。もう一度機会があったらヨーロッパを旅し、再びかの地を訪れ、この眼でよく見てみたいと思っっている此の頃です。

ともかくこの一年でさえ、世界は日々大きく変化しています。後十年経って二十一世紀が訪れる迄には、世の中はどのようなになっているのかは何か想像もつかないような思いがいたします。一九八〇年代の日本は繁栄の時代として、国は豊かになり、物は満ち溢れ、何かにつけて便利になりました。身近なことを例にとってみれば十

年前、私どもは夫々の家庭でワープロやビデオやコードレステレホンをとりつけ、休日には海外旅行を楽しむ世の中になると想像していたでしょうか。キャッシュレスで買物をしたりするのは、今ではもう日常的なこととなりました。しかし、こんなに便利で満ちたりた社会なのに、人々は満足し安定しているのでしょうか。決して一人ひとりが充実した世の中であるとはいえないと思います。物では満たされない何かがあって、その何かが欠けているという思いがあるからこそ、空しさの中に何かを求めて人々はあくせくと先を急ぐのではないのでしょうか。

一九八〇年代は物質の豊かさや新しい科学や、巨大な利益などが先行し、それに乗ることが時代の流れでした。そのため日本の国に古くからあった習わしやきたりとか、それにもなう礼節などは、時代が変わったとか、古くて不便だなどという声で切り捨てられてきました。勿論その中に折り込まれていた心も、切り捨ててきたのです。そして日本は盛んに国際化を唱えながら海外

へ進出して行ったのですが、現在世界の人々はそんな日本人を決して良くは見えていないとさえいわれています。物が豊かになって心が貧しくなったともいわれています。

私は新しい世紀の前の十年間の一九九〇年代は、日本の国にとっての地固めの時期であり、充実期でありたいと思います。もし二十一世紀が輝ける未来であり、落ちつきと明るさに充ちた社会をと望むならば、丁度幼年期が先への思いを一ぱいにしながらも、人間として将来への基盤づくりとしてしっかりと大地に根をおろしていかねばならないのと同じように、私ども一人ひとりが着実に将来の基盤となるものを培っていかねばならない時期だと思っています。

一九八〇年代を反省して、一九九〇年代は心の豊かさの時代にしたという声も聞かれています。この「心の豊かさを求めること」それは幼児教育の真髄であります。幼稚園の教育は遊びを通して一人ひとりの幼児の中に自発性・自立心・集団性・社会性・創造性などといっ

た大切な心が育つように教育しています。こういったことは外側から教えてわかるようなものではなく、子どもが友だち社会の中で日々遊んでいる間に、遊びを通して心の中に自然と浸透し、育っていくものなのです。幼児期は知識技術の習得の前に、人間としての基礎をつくる時期であると思います。人間の成長を植物に例えて見れば、植物は過剰な肥料を与え過ぎたり、いじりまわしたりすると良い成長が見られません。適度な水と太陽があれば、そのもの自身のもつ力で根を強く大地にはり、やがては太い立派な幹をつくり、枝葉を繁らせ、時期が来れば美しい花や実を見ることが出来るのです。人間も同じように基礎となるものを育てていかねばならない時期があり、これが幼児期なのです。幼児期はその人の人となりやを培う大切な時期なのです。周囲は落ちついてゆっくりと見守っていくようにあります。

二十一世紀に生きる人間として何が大切かといえば、自らやる力、やる意欲を持つこと即ち自発性を持つことと、新しくやること、新しく考えること、自分の力で考

え出していくこと即ち創造性をもつことなどです。そしてさらに、人とともにあってその心がわかり、その喜びや悲しさがわかり、思いやりや優しさの心を持つことなわけです。これらは毎日友だちとともにあって、ともに遊んでいる中で、子どもの心の中に徐々に育っていくものです。日々の積み重ねがなければ、今日教えて明日覚えるといった種類のものではありません。その代わり、子どもの中しつかりと根づいたものであるならば、決して枯れることはなく、自分の力で豊かに大きく伸ばすことが出来るものです。遊びを通して幼児教育をすることの大切さはここにあるのです。子どもは遊びを通して人間の基礎を培い、豊かな心を育てています。子どもの遊びの中に含まれている諸々の大切な要素は、単に目の前で見えている「遊び」の現象にあるのではなく、そのこととは子ども自身も気づかないけれど、子どもにとっては意味の深く奥のあるものだとすることを教師も母親も理解していくようにしたいものです。

またさらに、こうした人間としての基盤である心の成

長には、周囲の与える影響も大きなものがあります。平成二年度より幼稚園新教育要領が実施され、その中で環境による教育ということが大きくとりあげられています。幼児をとりまく環境の中の人的環境として、教師や母親の考え方やものの感じ方が幼児に大きな影響を与えることはいうまでもありません。人とともに喜び悲しむ心や、美しいものや小さな出来事などに感動する心を子どもに求めるならば、先ず大人自らがその心を持つことが大切なのです。私も子どもとともに人間として成長しながら、充実した一九九〇年代を送るようになりたいものです。豊かな感性、深い思いやり、優しい心などは二十一世紀になっても勿論、新しい科学の時代が来ればこそ、ますます人間の味わいとして大切にされていくものとなるのではないかと思えます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)